五十八番

日本紀略 七八九月 五

須佐笠松文庫

日本紀私記巻之五

秋 漢書律暦志ニ秋ハ収斂ナリト云ヘリ又説文ニ禾ノ穂ヲ成スト云ヘリ秋ハ禾ヲ収斂スルノ義ナリ又説文ニ秋ハ禾穀熟ナリト云ヘリ又春秋元命苞ニ秋ハ揫ナリ陰気揫斂スルヲ言フト云ヘリ又白虎通ニ秋ハ愁ナリ万物成熟スレハ人ノ心愁ヲ生スルヲ言フト云ヘリ又淮南子ニ秋ハ湫ナリ湫ハ湫隘ナリ陰気湫隘ニシテ殺気ノ方ニ起ルヲ言フト云ヘリ又春秋説題辞ニ秋ハ緧ナリ緧ハ急ナリ陰気急ニシテ天気清明ナルヲ言フト云ヘリ又春秋運斗枢ニ秋ハ金ノ精ナリト云ヘリ

蕤賓ノ月ニ至レハ天気ヤヽ収斂シ地気ヤヽ明浄ナリ早ク郊ニ出テ秋ノ来ルヲ迎ヘ以テ収斂ノ事ヲ報ス

假寧ノ令ニ依テ安寧ニシテ休沐シ神気ヲ収斂シ精華ヲ蓄ヘ以テ来春ヲ待ツヘシ

外ヨリ入ル所ノ肺気ヲ主トシテ清浄ナラシム

秋ニ至テ収斂ノ道ヲ失ヘハ

逆上咳嗽肺氣喘急
秋冬之候多發此病
宜多食白果以定之
又時氣初起頭痛發熱
腰脊骨節疼痛
風寒濕痺
手足麻木
小便白濁
婦人帶下
小兒疳蟲
白果煨熟食之
亦治酒病
生食動風
多食發熱
令人胸膈煩悶
小兒尤不可食
多食令人口乾
發瘡疥
生食令人嘔吐
小兒多食
令人腹痛
生食
令人吐瀉

燒せしむるなり
小児なども
摂生論にいえるごとく
衣服を薄事とこ
食は腹八九十日禽獣の脚と食へる次
書東垣のいえるごとく古人の云秋薑と含るがごとし
気を漏せしむ勝居後鏡にも又秋薑は人の
天年をそこなふ
如くに薑と食へども
筋力と減す

七月 立秋は七月の節の暑い七月の中 ○七月の異名 初月 孟秋 凉月 律月 と書れどもこゝは七月と書ことを昭せり

六日 沐浴

七日 七夕と云又星夕ともいふなり 荊楚歳時記にいえるごとく

七月七日織女牽牛の事 続斉諧記にいえるごとく

五雑俎にいえる元徴女子の妄言とあげ拾遺記にいえる浪説と記せり

きく婦人女子の俗に
星に願をかくるとて
彼これ
を赤土の
[illegible]

せう汲(くむ)み窮(きわ)編(まる)と云つる事かくやまとことばにも
よく〳〵もとおとめりくみ給(たま)ふ人を羽(はね)て窮女(きわめ)さ
るうやをとめの料(れう)ぐ〳〵ぬひ給ふ事の料(れう)ぐ〳〵ぬひ上(あげ)よと
ねがふなるべし嘉(よき)〳〵さおり又
此事をもたとへ物(もの)にこれといふ
いそぐ天(あま)と物(もの)そしれざるかり新煤(にいすゝ)黄(き)ろ風(かぜ)
無(なき)物(もの)多(おほ)し物(もの)の料(れう)を俵(たわ)なひ人(ひと)も
此事(このこと)をねがふなり又俵(たわ)をふる夜(よ)これを
二星(にせい)あひ会(あ)ふ時(とき)雑記(ざつき)に七月七日の夜(よる)
洒掃(さいそう)庭(にわ)とあやまり伝(つた)へるなどや

七夕乃(のう)うた 菅(すが)原(わら)集(しう)より 九(ひさ)ひら〳〵 二(ふた)行(ゆき)書(かく)
ひさかたの川水(かわみづ)の上(うへ)の糸竹(いとたけ)の調(しらべ)風(かぜ)みなひくとそれの時(とき)こそ
古今集(こきんしう)に 九(ひさ)ひら〳〵 二(ふた)行(ゆき)書(かく)
年(とし)ごとの今宵(こよひ)を待(まち)て七夕(たなばた)のぬるよのほかもと思(おも)ふ心(こころ)
また後朝(きぬぎぬ)風(かぜ)
契(ちぎ)りおきてわかれし七夕(たなばた)の年(とし)も一夜(ひとよ)のかずかずの
綾機(あやはた)星(ぼし)かれ天(あま)の川(かわ)
おりもせぬ地紙(じがみ)ぬりこそ天(あま)のかは女(め)は年(とし)よ一夜(ひとよ)ぬれ
新拾遺(しんしうい)集(しう)に 菅(すが)原(わら)関白(くわんぱく)左大臣(さだいじん)
いく秋(あき)と絶(たえ)ぬ契(ちぎり)や七夕(たなばた)の糸(いと)よりかけて祈(いの)るも

新後撰集よ　弓治新五

まれに行く水をあふぎて七夕の

七夕乃行杜牧

雲階月地一おもむき。未抵経年。引恨多。最恨明朝

波車雨不回脚。波天河

又　異舞系

雲幌千波斗柄移。牆烏慢引鵲橋遅。更使銭塘

塔河浅。一水還有相思時

又

織女牽牛雙扇開。年々一度逢河来。莫言天上

秋おもき狩勝人間去函

○今日索麺とくふ事ハ十節記よそくむり言葉

氏乃おる七月七日よりそ重畏となり今ハ瘧

病とやまひむるよりそ索餅をとめそ日ハ

そ食日よりそくそ索餅をそくへ瘧病とうれそ

人こそ日索餅をそくへ瘧病とうれそ

出たる家をまくむ事ハ外風

黒漆よ盛し肉鮓食色懲よ傷られて病るもの

肉鮓をそ裏傷ハ秋為痰瘧こ乃そうまれ

よく摂生せいとのつつしむべきなりんたとひ

日素餅を食して病根除きさりしかバ
うれ愛とまぬうるく事のくんや決してこれ程
なし世の人かく深く言を作へうて
○今茨二星と為うて厥果を作へうて
香の死をうる多く笑へうて五色の糸をつう種々な史
志うく男女うる才能の稱といひ乃ち是れを包所
翼といふなり或衣服を賜し書史をさうし事
なり史事日本うていう天平勝寶七年にうまり
しより云事根源より又云うり織女祭乃儀式絵巻
七夕祭ふも乃ち是也
○瓜を芽乃糸杜霊を破るもう

で梶乃葉よりくうり新勅撰集の哥よ
世よ此の雨うくその心深み新嬉共梶はいうこそはし
乞巧奠乃事家雑記に見えたれこれ
又うれ姫久しう事なりへしされども婦人女の
たる事多くは書すなり趙う記乃載
乃をへお事よ行うす書籍衣服をさうしてや都濃も脇井の書をさし
の風ふくと雨うる事うる
流感も積鼻裡とくる
今夜ふ集よ結因法師乃哥
七夕乃昔共衣とうる人なうくうを志うほし

海気霽うて七夕の祭み
天上銀漢妙に絢ぴ百家蕃数署新秋淫雨来世事
多児戯不獨人間乞巧構
揚朴の七夕詩
珠香案牛忘羌何。竟。巡檄世昇舎校。幸く乞與
人間約。不過二人百約実匆
○今日菓九と合せ麺と供てよしと雲に月令なり元
たり此日皮裘と曝せい暗とを驚と七巌にそうり
又角黍と称く粔籹書籍よ乗い義と碑と
お塾幸新よ見てくり

十二日 二日より今日まで乃百雨ふ
懶塵ごと掃ひ塾遊とかりて塵埃とたゝ
へ一九懶塵をたゝくふる一年にてふ一たるが
よく多懶塵ことはゝとせと日ふでく天童を
ようゝざる事多れい時晩なりし月の日よりを
よくなすぐ倩れそうるゝひてよし
○生見人乃教俗てゝ聖より初やうこゝお
るより酒市ふとおそり又餐をなるなり
ゝ乃世よりそん今乃世俗よをろう
なり死せる人をまつるよ今いまろ人と

おもひうかれ　そのまゝ筆をとりぬ

○今東世俗の人なき紀頌の事をく史を愚
つゐよりあるく遠ふるる行う愚更画ゐ生せもるよたうす
士君子たる人を智ふくく変也ざるうや仏氏乃教ゐ
まどひ安よしと衆雑組ゐ中元乃勢ふ雑組ゐも中元乃勢ふ雑組ゐ也
かくふよ〳〵なく事ふ
ふそ俗ふされい血雑組ゐ中元乃勢ふ雑組ゐも中元乃勢ふ雑組ゐ也
〳〵ふ縁ふる人冠服を当くく卯ゐ出家と望く
揮讓し神を奪て入寂享てゝこれを送てお斎廻
乃縁と称よ仏されと駁よちう〳〵とゐ当いふろこ

十五日　今日七卯元と云風俗蓮葉飯と称〳〵て来客
ゐ家〳〵歓喜ゐことく　按ずるに事始紀事ゐ今世七月十
五日嘗倭尼作ゐ俗之盂蘭会ゐ本因蓮事ゐ
後代度ゐ弟子乃包割木育行按工巧也今ゐ人第仏作ゐ図絵ゐ力其前
ゐ卓に財報饌果食浅目蓮救母畫像ゐ紀之一処之ふ
きそ考しふ今ゐ
ふ〳〵此歌今青墓ゐ者ふ父母先祖ゐ墓と称清〳〵今日墓ゐ
ゐふとこれふ　ふづふ部ふくも素食〳〵生祖考妣代霊牌と
おいて饌食とふ卯へ酒果と供ふねて参ふこふゐも
又世ゐ女ふ装束ふ美麗ふ七月十四日祖先ゐ墓参〳〵て墳墓と清すとふこれ深厚乃設ふとぐびて

かくれきつくしなくもすまのことく久しくとの
ごまおもくをせ絶義なく一西遊よ志行の人いまの人でなく
さる人寺 朱子のつくく輯録の條をせ鄉月十日用法度一設素儉一集ふ用
をして佐さまさづりんとおもひ一墓の事よ燒雜といはず
そのの人墓石よりく沸しきこと一墓の事よ燒雜といはず
先祖代々墓をおよりく沸しきこと一墓の事よ燒雜といはず
なひごろにすへうこと今夜を世佐さぞりて親
おきの人い墓よりく沸しきこと一墓の事よ燒雜といはず
そのの親ある人をきこと一墓の事よ燒雜といはず
きくくまうをいり多ふ一墓の事よ燒雜といはず

先祖代々墓をおよりく沸しきこと一墓の事よ燒雜といはず
こと七月十五日盂蘭盆數多一墓の事よ燒雜といはず
目蓮尊者と称ふ事と一墓の事よ燒雜といはず
盂蘭盆經よりの事と一墓の事よ燒雜といはず
そのの人竹をぬきくこれを一墓の事よ燒雜といはず
四角にこれを竹のさきよ分くやうにわりて一墓の事よ燒雜といはず
作くる方法と見ふこれを盂蘭盆一墓の事よ燒雜といはず
をいふ又父母親類なきこと一墓の事よ燒雜といはず
よふ繼祀富ふまことと盂蘭盆一墓の事よ燒雜といはず
て先祖と等しく秋代家事と営ふとおもへ

ようの風俗どうやらこれかく行事とりく
源屋氏同蓮の事と海舎にて伝へ盂蘭経
左と心得の書と綴りて盂蘭とあさむくうや祝 國
ふく盂蘭盆乃供養ととの事聖誠帝乃天平
ゐ年より始りしより縦日本紀より考へり年中
り事魂祭礼事ふくそ前大納言
きてやや同義ふくそ伝ふくそ
○五雑組よそく七月朔元日は盂蘭盆会とて門戸
毋懸鬼迎ふ祖功徳と設く依の俗鬼と
ふく食とるとそのむとそ世俗たゝひ混屋

乃ふくまゐりてそ
柏槃世界よまゐりふく
てこれとまつるそ始
○此会より十七八枚
鉦を作す歌工とあ
乃又ふれこ
ありそろこ
乃ふくやめくるふう
又雑組ふくう
○又七日世俗ご海乃潮流とせ次そろう
まや居の百万巻ご中元日此俗利石採画とふくう

十六月 閉倍心日男女交接極樂又やどりて
如嬋ハいとこひくやまひ
○今按ニ蓮葉ノ表ノ葉ニ遊ビ月ト云ヒ裏ニ遊ビ月ト云ヒ
秋ニ月ヲとゝめ月ニ交ルノ時ハ八月ヨリ九月
ニ至ル月ト云ヒ月ニ交スル兒ヲ七月ノ兒ト云ヒ
なし如ノ人ハ事ヲ行ヒテ今夜ヨリ
月ヲ賞翫ヲとゝまる事ナリ

晦日 休浴
此月秋涼ノ始リ夜ト晝トノ氣候ヨク調ヒ事
なしなり乃陵理形ヲ養氣ヲとゝまる風アリ

感ジやすし夜感冒傷寒痰嗽喘急ノ病ヲこゝろ慎
てこれヲ防ぐべし

此月ニ梅ヲ漬ケ醬ヲ搗ク梅漬ニ
ヲ去ル法ニ樗梅ヲ去ヨ水ヲ入ル事ヲ水多クテハ
かゝるものなり水ヲ少ク入ル事ヲ
ちゞむものなり梅ヲ入ル一夜ヲ過テ
ヨリ汁ヲ取ヲとすし色ヲ一夜ごとに
又右ノごとくなすに水ヲひたすかゝる
漬テ四日ヨリ後ニ梅ヲ出ス色ヲ改ル
ヲ見ヨ入ル紅梅漬ヲ久シクヲ付ヤスク
ヲとれより垂ヲ入ル事ヲ絶ヘからず

又桶の作筒にてくり池よひて玉をよく〳〵又春の桶よ入
板とる風ようくべきぶよ濁りのうくよ長板よ入てその
上よ蓋をして帯よてくくかけくく〳〵如此をれば
やをて取出す時をうるはしくして
あくふの栓とさすべし栓漆をくく如此の命〳〵ごぶ紙を
通ろ実床よ重い勅捏して按女す
天気好時なれ雪女ろ紙とろひ
作〳〵製法先人勤よより女面のよなる紙とろひ
ぬりおり数よ水の入くよ紙のごとくひて〳〵空方とろる
さるくよ重〳〵之中よ風ろい及布をよりくぬきみくをし

金紙をて包おりより再ろひまろひのりえいやきおりえ
ちぶ加えてのりもくつぶけくよ重〳〵これの
ちとろるさすべてよりくて水よ入ろうと去
て一重よ壁あ焼飯のごとくまりかくあくよ紙よて包
契原れるよくよりまたさ紙附かよ取おりえ
ちえて細えをろりこさ重ふをまもくすり合完と用て去
ぶごえを他えくしてろうなるひのろうとは他ろ附物数乃ごと
て空方ちえ守よ要ろうとをのをえ汗と赤てのれ
くるさ紙とひろぶをつぶあよ布ろうくろ去ぶのり
とろりてつぶひろめかえをりのよより卵へ二字位おりてよし

さく二通目をそよそよ
のちぐりとをひさくろひろぐりの紙
ひろぐくとけと用くそよそよとひろて紙くと
て対紙とこれとのをさやうくと分合して付又
次ようつのもり分やう物のてんてとの紙もり分て
うつぐきの墨方どそそもり付てをより二通定て
同おもり紙よりをかうを無双同と地のぐく志ぶを
引て右ぐくま合空うんたのてくして紙ちとより外
罫紙付合うの紙をとより志ぶと引て紙ようとよよ
てよよあけく紙よりのかと同よ通て紙もり付え又

かのうをとくうの乗りとよよ一度んそり付うく
らくして先ともーとおおおます新とぬき趣向
てうのおりうる紙よ志ぶと引地りてよ通て紙
もり付地柄のよふうをとうくと志ぶうとをろけ紙
付く後用よおよへーかりて後又うとをぶと二三へん
引毎度年へーかり編うく後裏よ志ぶ引へーかり次
表ひく後裏よ志ぶ引やくへーむーろこうと上表
汚よそよりてよーと志ぶくとをうの表かよひろ
付墨よ新へー

立秋の後若及蔓菁蔓高苣乃種と前へー

よりて宅中うえ菜蔓菁をつよくまけ食なり
きうえ月乃後まくへ蕪菁を出すくなり一これを
ちやくさんされ大根みし一七月初まくへ一もの蕪菁奉
蕪菁も蕪菁と同時よりまくへ一地をされ大根より
宅かまへ虫をくなりつよく苗そだち一胡蕪菁とさ月
乃初まくをすゝめ大蒜小蒜をもうゑ大蒜ハ苗取
とりうゑ小蒜ハ根とうゑ
八月の末まで度と收むる法まき植と取ちがこと去皮
と收りよし乾す
四月蓼と食なりうえ場尓ハ人と害す葉と

食ハ目と栫す虜精をとくへハ氣とうごかし葉莫
とくへハ邪氣とやぶり息數と多く食ハ人と傷り
發と食ハ氣とうごかし久生露と多く食ハ人と暴症
乳と等し生薑と食ハ發瘡と多く食ハ邪氣
を栫す立秋乃後蓼と食ハ霍亂と多發す
立秋後十日凡と多食ハ久月冷寒氣の者
立秋後七月發瘧とくをひ冷水と多く呑ハ久たゝ
寒河客なくとも後日より動て病と生す又七八
月乃間漁事ゆえうえ動乃時生冷乃物果等
を多く食とれハ脾乃氣肉よ滯つゝて癪癖とう

七月乃古候半一通風玉半二仰雲深嶋
古秩の三候あり半
姫蕭半古禾乃登古秩屋古半古刻十分夜四半古刻十分秋屋古半古刻十分夜四半古刻
登古半古刻十分秋屋古半古刻十分夜四半古刻
朝日能古八朝と云今日古

八月

事能り云の根源よりそこ云半教なし又
西教云をおくす世俗の風儀あり本假名記よ建也の後深
年号乃話より山事
と打数かそうあみそ人乃そ人乃
とやや又余頃る大閑
ぬよ天下に流布せそ
話乃事なそう教
て外風通方に代半
さそ乃男女
半記よ重宝

の抽賞に依よりて始めて下賜ありしとぞ
下されん條のされども短慮武士の常なれば
之決まるべく國史まで根源乃祝をも知らずそれいぶかりを覚
思ひてや條書をもて乞ひ請ふ人の數多く今此書よりの周乃者
も多くぬるを不堪ふ秋乃晩の數乃ものの
とぞ云ふ如何のそれつめたしとぞ云ひ
さまも八月朔膳となす條よ色と膳膓とぞ

月令廣義潛確類書ありなどを初乃条々に乃てこれ膳八回數乃新下賜せる事八日なれ八朝の祝義と色
○今日　禁裏より　将軍家
より色ゐ勅上にて祝條
十四日　明夜乃淡路
書こと淡路乃八月十四夜乃
銀漢共に雲霧晴垂乃玉鏡初上欲圓時清秋書感
十五日　中秋とぞ云ふ秋九十日乃内半乃夜乃月條

今日八幡宮ノ御祭禮ニ付ク放生會ト申シ事ハ人皇四十四代元正天皇ノ御宇養老二年九月ノ大風日向國ニ起リ逆浪國ヲ浸シ人民多ク溺死ス依テ神功皇后ノ御宇ニ新羅ヲ攻メ給ヒシ時ノ船ニ用ヒ給ヒシ軍船ヲ引キ寄セ彼國ヲ征シ給ヒシ事ヲ思召出サレ放生會ヲ行ハセラレ給ヒシヨリ此ノ會義年久シク行ハレ給ヒシ故ニ今日マデモ絶ヘス行ハレ給ヒシヨシ然ルニ近年ハ漁人ノ網ニ掛リシ魚ヲ買取テ放ス事ニ成リ行キ漁人ハ益々網ヲ打チ魚ヲ取リ候テ放生會ノ御祭ニ出シ候ヨリ外ニ益ハ無之候

日本ハ八月十五日新羅ヨリ百濟ヲ攻メ給ヒシ事ヲ思召出サレ新羅ヲ攻メ給ヒシ時ノ如ク船ヲ用ヒ給ヒシヨリ年中ノ行事ト成リ候ヨシ

○今日ハ秋ノ彼岸ノ入リニ付キ雅樂會ト申シ候テ雅樂寮ノ樂人ヲ召シ寄セ樂ヲ奏シ候ヨシ

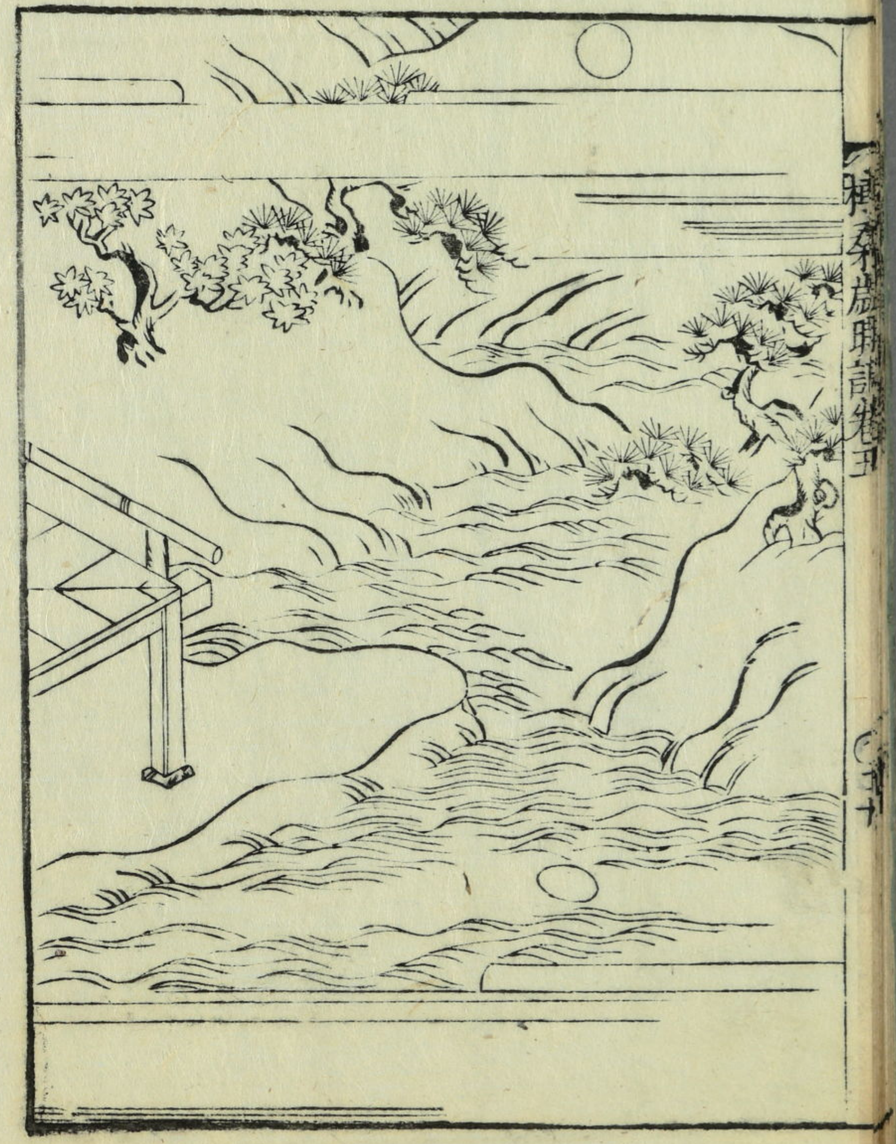
○今日ハ秋ノ彼岸ノ入リニ付キ雅樂會ト申シ候テ雅樂寮ノ樂人ヲ召シ寄セ樂ヲ奏シ候ヨシ三五夕ヲモ今宵ノ事ニ候ヨシ

○今日ハ秋ノ彼岸ノ入リニ付キ雅樂會ト申シ候テ雅樂寮ノ樂人ヲ召シ寄セ樂ヲ奏シ候ヨシ三五夕ヲモ今宵ノ事ニ候ヨシ

○今日ハ秋ノ彼岸ノ入リニ付キ雅樂會ト申シ候テ雅樂寮ノ樂人ヲ召シ寄セ樂ヲ奏シ候ヨシ三五夕ヲモ今宵ノ事ニ候ヨシ

まやうりこしにそそぎ香餅を製してそうくの
供養に備り月餅と号し又月餅西瓜
等を合して看月会をなすこと月令度載せたり
歐陽詹の観月詩序に月之為観尚矣別蓄二重大観一観月
別蓄二重大観一観月於物乎如孟秋十五夜月之
於二時候一也故観月之人敷句外塵寰脱秋之
氣象一矣況乎地居二海嶠一而清輝不レ減二中州一
旗幟不レ変二異郷一而郷園在レ望乎又曰
入二西樓一則骨与二清涼一俱冷
○書王安石月歌云月出水之精秋出金之氣

金氣水精是謂二天成一因而名レ之曰二太陰一
水精金氣是謂二月明一秋之為レ月尚矣別蓄二重大観一
観月於物乎如孟秋十五夜月之於二時候一也
故観月之人敷句外塵寰脱秋之氣象一矣
況乎地居二海嶠一而清輝不レ減二中州一
旗幟不レ変二異郷一而郷園在レ望乎又曰
入二西樓一則骨与二清涼一俱冷
○書王安石月歌云月出水之精秋出金之氣
金氣水精是謂二天成一因而名レ之曰二太陰一
水精金氣是謂二月明一秋之為レ月尚矣別蓄二重大観一
観月於物乎如孟秋十五夜月之於二時候一也
故観月之人敷句外塵寰脱秋之氣象一矣
況乎地居二海嶠一而清輝不レ減二中州一
旗幟不レ変二異郷一而郷園在レ望乎又曰
入二西樓一則骨与二清涼一俱冷
○書王安石月歌云月出水之精秋出金之氣
金氣水精是謂二天成一因而名レ之曰二太陰一
水精金氣是謂二月明一秋之為レ月尚矣別蓄二重大観一
観月於物乎如孟秋十五夜月之於二時候一也
故観月之人敷句外塵寰脱秋之氣象一矣
況乎地居二海嶠一而清輝不レ減二中州一
旗幟不レ変二異郷一而郷園在レ望乎又曰
入二西樓一則骨与二清涼一俱冷
○書王安石月歌云月出水之精秋出金之氣
金氣水精是謂二天成一因而名レ之曰二太陰一
水精金氣是謂二月明一秋之為レ月尚矣別蓄二重大観一
観月於物乎如孟秋十五夜月之於二時候一也
故観月之人敷句外塵寰脱秋之氣象一矣
況乎地居二海嶠一而清輝不レ減二中州一
旗幟不レ変二異郷一而郷園在レ望乎又曰
入二西樓一則骨与二清涼一俱冷
○書王安石月歌云月出水之精秋出金之氣
金氣水精是謂二天成一因而名レ之曰二太陰一
水精金氣是謂二月明一秋之為レ月尚矣別蓄二重大観一
観月於物乎如孟秋十五夜月之於二時候一也
故観月之人敷句外塵寰脱秋之氣象一矣
況乎地居二海嶠一而清輝不レ減二中州一
旗幟不レ変二異郷一而郷園在レ望乎又曰
入二西樓一則骨与二清涼一俱冷
○書王安石月歌云月出水之精秋出金之氣
金氣水精是謂二天成一因而名レ之曰二太陰一
水精金氣是謂二月明一秋之為レ月尚矣別蓄二重大観一
観月於物乎如孟秋十五夜月之於二時候一也
故観月之人敷句外塵寰脱秋之氣象一矣
況乎地居二海嶠一而清輝不レ減二中州一
旗幟不レ変二異郷一而郷園在レ望乎又曰
入二西樓一則骨与二清涼一俱冷
○書王安石月歌云月出水之精秋出金之氣
金氣水精是謂二天成一因而名レ之曰二太陰一
水精金氣是謂二月明一秋之為レ月尚矣別蓄二重大観一
観月於物乎如孟秋十五夜月之於二時候一也
故観月之人敷句外塵寰脱秋之氣象一矣
況乎地居二海嶠一而清輝不レ減二中州一
旗幟不レ変二異郷一而郷園在レ望乎又曰
入二西樓一則骨与二清涼一俱冷
○書王安石月歌云月出水之精秋出金之氣
金氣水精是謂二天成一因而名レ之曰二太陰一
水精金氣是謂二月明一秋之為レ月尚矣別蓄二重大観一
観月於物乎如孟秋十五夜月之於二時候一也
故観月之人敷句外塵寰脱秋之氣象一矣
況乎地居二海嶠一而清輝不レ減二中州一
旗幟不レ変二異郷一而郷園在レ望乎又曰
入二西樓一則骨与二清涼一俱冷
○書王安石月歌云月出水之精秋出金之氣
金氣水精是謂二天成一因而名レ之曰二太陰一
水精金氣是謂二月明一秋之為レ月尚矣別蓄二重大観一
観月於物乎如孟秋十五夜月之於二時候一也
故観月之人敷句外塵寰脱秋之氣象一矣
況乎地居二海嶠一而清輝不レ減二中州一
旗幟不レ変二異郷一而郷園在レ望乎又曰
入二西樓一則骨与二清涼一俱冷
○書王安石月歌云月出水之精秋出金之氣
金氣水精是謂二天成一因而名レ之曰二太陰一
水精金氣是謂二月明一秋之為レ月尚矣別蓄二重大観一
観月於物乎如孟秋十五夜月之於二時候一也
故観月之人敷句外塵寰脱秋之氣象一矣
況乎地居二海嶠一而清輝不レ減二中州一
旗幟不レ変二異郷一而郷園在レ望乎又曰
入二西樓一則骨与二清涼一俱冷
○書王安石月歌云月出水之精秋出金之氣
金氣水精是謂二天成一因而名レ之曰二太陰一
水精金氣是謂二月明一秋之為レ月尚矣別蓄二重大観一
観月於物乎如孟秋十五夜月之於二時候一也
故観月之人敷句外塵寰脱秋之氣象一矣
況乎地居二海嶠一而清輝不レ減二中州一
旗幟不レ変二異郷一而郷園在レ望乎又曰
入二西樓一則骨与二清涼一俱冷
○書王安石月歌云月出水之精秋出金之氣



張景安の中秋の詩
万里秋空掛二孤標一恰与二清輝一相映照
皆是別人今宵冷眼看

朝早競べ馬

夜く池辺の月生。卻退此秋易天明迎雅客

秋江水添入銅壺漏暁更

朝よく笑り詩

湖国晴明鏡浮二新大刀一勢並二比叡一聳二桂御天一
水疑雲雪林棲見二羽毛一時瞻白亀壺欲数秋

卻廉郎の句

一年一度中秋夜。十度中秋九夜満。来満東順南
和尚。番明仍候。天人共雲照。情非浅不眠
親附。深浅若古人詩句好。何堪千里共嬋娟

○今朝墨染と荷い月令度義よりそうろう又いそく牡丹を掘し載る事
今日してよう宿生よ宜うろ汲る此根を浄く洗へ
茶酒とりく洗へ花物なり

二十七日 孔子乃生れ給ひ日 それ也の説あり
昨夜夜物がたり

勝日 沐浴
そろそろまいる社日うそく三秋乃後半又の戊社日土乃

祢と云ふ(説よ二月の祢よ世俗社と云ふ)
(ふ)ふ(ふ)ふ(ふ)ふ

月末ニ隣郷ヨリ越ス銭ト云ヘル人ヲ新穀ト云ヘル
廿月家地乃人ヲ新穀ト云ヘル
そのゝち親戚ト宴ヲ設ケ
廿月頃風ノ時人多ク風ヲ感シテ痲疾ヲ患ヒ風ト極ヘ
宅中ニ入上旬ヨリ多ク落葉ス廿月ノ末ニ至リ尽ク落葉ス
蔵甚疲羸ヲ上旬ノ初ヨリ病ム十一月ニ至リ死ス二月ニ至リ四隣ノ家
ヲ売リ尽シテ生ヲ立ツ四隣ノ家ニ有リシ柿樹ハ皆ナ枯レ
ニ有リシ器栗ハ却テ実ヲ結ブ十月ニ至リ元ノ如ク繁茂シテ元ノ
ヨリ多クシテ元ノ如ク繁茂シテ元ノ如ク繁茂シテ元ノ土

あつ元ハ土ニ入レ
しけ土ニ入レ
べし元ハ土ニ入レ
虹豆ハ土ニ入レ
ねより土ニ入レ
てよく土ニ入レ
収豆ハ土ニ入レ
熟して後薬して肉ヲ剥ヒ去テ収
豆ハ土ニ入レ
ハ元来ハ我宅ヨリ

とう五味性冷
七月苗を採へし　なまを生
乾枝葉苦味津洞陰法下五秋採宜晩春実葉各
陰莖痿也　もそよ二月の都す
九月竹とれハ堕す　月令廣義ハ六月
竹とれハ不堕とハ
ありく賊毒へし　元拾遺ハ竿
おくやまその蛭あるく　ハ永く不蛭まる
蠹毒稗乃灰汁をよく洗ふをよし　滅水久しく
浸しおくを出してよく幹候栖矢藁木刀等も
七月つよ摘み稈と収毒へし　布とふ〳〵紅花と用ひ絹布

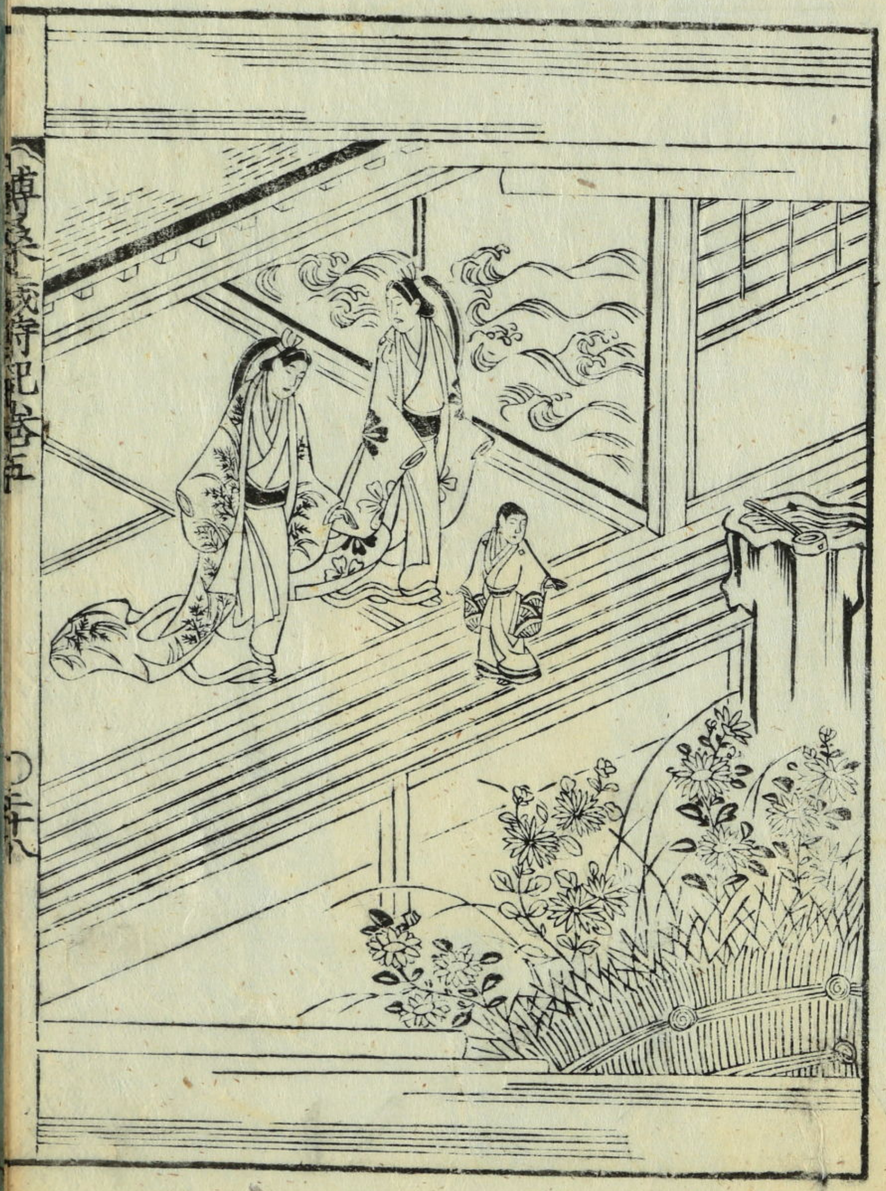
と染毒をくらふて死ぬ
九月天寒冷なり多く生果を食ふて泄生蒜雑菜并
生蜜雞子鮮魚と食ふを忌
書の本草普養書月令
廣義ハ乃そふり重と見ゆ　七竅ハ
流涙と鈍事かふし人をして瘧脚軟と為せしむ
八月の六候　月令廣義ハ三候
羞　太白毒乃三候ありて
蠹堪　戸　方水妃泄　太秋分乃三候ありて
白露昼五十二刻十分秋分昼五十
刻夜五十刻　月令廣義

九月 ○重陽 ○菊月 ○秋深し ○秋尽 ○九月の末の事 ○季秋 ○暮秋 ○晩秋 ○なごの月 ○ながつきを○九月八日を菊の節句と云 ○九月九日を重陽と云 ○九月尽を秋尽と云

朝日今日より八日まで施行

八日 沐浴

九日 重陽と云 月と日と二かさなりて老陽の数よりて重陽と云 又今日菊の酒を飲て邪気を払ひ齢を延ると云 ○菊酒 ○菊の宴 ○菊の節句 ○菊の日 ○菊の盃 ○菊の雫 ○菊の香 ○菊の花 ○菊の露 ○菊の枕 ○菊の蒲団 ○菊の着せ綿 ○菊の被綿 ○菊の湯 ○菊の湯漬 ○菊の膳 ○菊の料理 ○菊の羹 ○菊の汁 ○菊の吸物 ○菊の和物 ○菊の浸し ○菊の膾 ○菊の鱠 ○菊の鱠 ○菊の鱠



烏帽子岩の西風満眼愁
遊船月の九日乃ち
屏風瀧聯句興に乗じ人世を遠
僧共三人蒲団を敷き
枯れ尾の九日海上の詩
江湖秋気屏風に満ち
野に笑う蕃薯の隅に傍う
五周忌と怨霊瞬く古社今来易めし
猶泊る

○今日蕃紀文黄昏より

蕃もも九月三夜一雨一魏十九日より十月念廣義に至る
十日 岡佰今日より是迄とくと三月晦日まで絶えず
十三日 佐佰今宵月殊更美ねく夜よい八月十五日九月十三日八蜜宮ゆり
清明なる故三月と称し良若くすや又えう雲れ
ともしば絶ず十五夜牛宮と深く考えう
又月未大小あり三ツ五ツ九ツ十三夜と月数
名月と云ふ事なり十五夜を満月と書す
名佳節と云り我国より又九月十三夜と月数

を廿日ばかり流れ十日ばかりと書いてあれば昔に
月日もちがいとおぼえ又夏冬通ふべきことわりを
てこれ日と限りたるにはあらねどといふ事を
こうにもそうにもたらぬ事といふ事をたらぬ
月ばかりと書いてあり又蔵人弁宰相の
つとめて蔵人弁の御局の戸をたたきしかば
まいりぬ夜中ばかりにやあらんとぞ
第二の巻にも又蔵人弁宰相の君
第二の巻にも又蔵人弁宰相の君

夕ざりつかた大納言殿まいり給ひて十二夜月
のいとさやかなれば殿上にて御遊ありて
おもしろき事どもありてそのついでに
女房ども物語などしてあかしてのち
なりぬ 今夜は十二夜月と書
今夜は十二夜月と
書けるなり

金葉集に大宰大弐重家の九月十三夜の月を詠める哥
こもとかき紀後と見ゆる人なれば
平載集にも後人名ありて
俗は月ちかくなりてこそ
風雅集にも左京大夫顕輔

くれの如月のさくらもたねをこぼす哉

蕎麦遅通 号法性寺殿 九月十三夜歌仙終よ

脇 那勝寛月お隙漏屋の漏
第三 渡雲も紡樽家の苔径
四 百年完茅公相侯の茶将回首乞清潤娶儀千金

脇曰 沐浴

七月部越して無腸となふ

上旬小中茎とうく下旬に大茎を賞へし麦も秋うちまく

交雑とも赤小豆の時八割とうくほと月令農義ニ云リ

地肥饒なる赤そまくらの生ハ甚繁茂しくこゑめし

十月ニ成十二月初まきつくへし

元茎とニ成ニ九月以前ニ播ものハ漸ニ抽苔ものハ漸ニ花ひらくと云ふ

交雑とも茎ハ日に筑し一ニ長とも茎ハ漸ニ出ニ

ニ成ニ低地ニ蕎麦ハ漸ニ落花ハ

ホカせハ氣うもくなるかそうんとしろ母そやく收て

法よ平ニ

七月牡丹苔菜及竹筒果木とうつし植てよしと月

令農義ニ云ニ農政全書ニよりて元果木とう

ゆるふ也九月乃弁此後植のまりとありて縄と

いくまいりとかくけるかりたるふかい腰をを入地を浅く
し次年正二月ころ移植(うつし)(きてそのの
秋に至し
此月栗と牧(まき)蒔(まく)べし一月余廣(ひろく)教(まく)ものくるし栗と
取水(とりみず)重(かさね)同(おなじ)ように入(いれ)炒(いり)て冷し新壷(つぼ)へ入(いれ)油(あぶら)一重栗一重(かさね)
また一二百入(いれ)今多きいかりしく竹葉(たけのは)を地(ち)とくひそと
と竹(たけ)はあしろくなる花(はな)あるくちを地(ち)とくてこれ
いなる塊(かたまり)ふれ壷(つぼ)とうつむきて至(いた)りて油(あぶら)をもちう
づつるなりれ又塩水(しおみず)を一二杯(はい)浸(ひた)しく取(とり)おき
胡麻(ごま)を神世(かみよ)栗(くり)へ入(いれ)重(かさね)しそ又(また)塩水(しおみず)山中(さんちう)の聖人(ひじり)の

好(よき)ふ生栗(なまぐり)と二日(ふつか)日(ひ)かりこと後(のち)陰乾(かげぼし)くし又日(ひ)かり
壷(つぼ)へ收(おさめ)そとぢ重(かさね)いて味(あじわい)更(さら)よりと
又大栗(おおぐり)とをふくく脇(わき)一重(ひとかさね)栗(くり)の芽(め)生(はえ)をとりて
やきうをおて壷(つぼ)へ入(いれ)重(かさね)ふくく脇(わき)一重(ひとかさね)栗(くり)の芽(め)生(はえ)をとりて
用(もち)ふ而(しかして)栗(くり)此(この)芽(め)出(いで)ずるを代(かわり)に小(ちいさき)壷(つぼ)へ一(ひとつ)ずつ
小(ちいさき)あきうさ海(うみ)なしの方(ほう)と地(ち)よ対(むかい)重(かさね)へし芽(め)
生(はえ)ずる久(ひさ)しくこゆのうり又(また)赤土(あかつち)と甚(はなはだ)よく入(いれ)
用(もち)ようづる重(かさね)くもし用(もち)多(おおく)
此時米穀(こめ)と求(もとめ)炒(いり)べし一用(ひとつかい)
此月薑(はじかみ)と含(ふくめ)るなれ痼疾(こしつ)となる小蟲(むし)とくへ祈(いの)を

多く食へり次に雞と合せ加減と食へり次に雞と
と和して痢疾と治す
九月の古候雀一海鳧に鳥来賓雀二雀入二大水一為蛤雀
三翼宵二鷺鳥鼠六候なり雀四翻乃鷲
雀五鷲の木鷲鷹雀六候也
白露節一鴈賜祀卷之五十四別十分 月令廣義

叢書第五十五